

# インフォメーション サーキュラー 14

1973年1月

## 内 容

I	役員選挙の結果 .....	1
II	第6回大会予告 .....	2
III	学会からのお知らせ .....	3
	会費納入・学会刊行物バックナンバー	
IV	研究機関紹介 (その3) .....	4
V	会員変動 .....	8

## 日本発生生物学会

大阪市住吉区杉本町

大阪市立大学理学部生物学教室 (〒558)

◎ おそくなりましたが会長・運営委員の選挙結果をお知らせ致します。新しい委嘱役員（幹事長・幹事・会計監査・単行本編集委員）については、近く行なわれる運営委員会後のサーキュラーでお知らせします。

◎ 今年の大会日程が決められました。前のサーキュラーでお知らせした日程より少しおそくなりました。

◎ 会費納入は同封振替用紙で、よろしくお願い致します。

事務局

インスタント人工海水

**アクアマリン**

姉妹品 ◇ ポースアクアマリン(海水魚淡水魚同時飼育剤) アクアマリンM (人口海水用添加液) アクマリンK (海藻育成液) 其の他

**八洲薬品株式会社 水産事業部**

大阪市西区京町堀1丁目145 TEL (441) 3036・3037・2191  
3038・3039・1422

## I 役員選挙の結果について

### 1 会長選挙結果

11月20日ㄨ切で行なわれた投票の結果過半数を超える得票者がなく、12月12日ㄨ切で第2次投票が行なわれました。その結果は下記の通りです。

当選 相山正雄

次点 江上信雄 (投票総数131票うち無効1票)

### 2 運営委員選挙結果

11月20日ㄨ切の投票の結果は次の通りです。

当選 金谷晴夫 ・ 江上信雄 ・ 大西英爾 ・ 丸山工作

黒田行昭 ・ 石崎宏矩 ・ 岡田善雄 ・ 樋渡宏一

柳島直彦 ・ 平本幸男 ・ 川上 泉 ・ 小嶋 学

遠藤善之 ・ 毛利秀雄

次点 林 雄次郎

(投票総数108うち無効5,白票2)

1972年12月13日

以上報告致します

日本発生物学会第3期会長・運営委員

選挙管理委員会 (委員長 竹内郁夫)

## Ⅱ 第 6 回大会について

前のサーキュラーでお知らせしました通り第6回大会は今年京都で行ないませんが、日程を少しおくらせました。現在準備委員会で決めたのは次の通りです。

大会：9月3日（月）午後の開会し，9月4日・5日にわたる。

会場：京都市左京区 京都教育文化センター  
(京都大学附属病院正門前)

大会の内容：希望テーマをつのり，それを基にして大会準備委員会でいくつかの小グループの集会をオーガナイズするといった試みも行う予定。

大会参加申し込み〆切り 5月末日

大会講演などの原稿〆切り 7月10日

1973年1月5日

第6回大会準備委員会 (委員長 岡田節人)

### Ⅲ 学会からのお知らせ

#### 1 会費納入のお願いと納入状況

昭和47年12月25日現在で、会費の納入状態は、下記のようになっております。  
会費は、前納制ですので、昭和48年度分（会計年度も歴年制となりました）（S48.1～S48.12）を、できるだけ早くお納め下さいますようお願い致します。  
尚、昭和47年度分までの会費の未納の方には、昭和47年8月、運営委員会決定によりDGDの発送を一時中止いたします。

会計幹事 小谷 穰 一

御参考までに今までの納入状況を表示します。

昭和48年度まで納入済	22名 (4%)
昭和47年度まで納入済で48年度未納	353名 (74%)
昭和46年度まで納入済で47.48年度未納	71名 (15%)
昭和45年度及びそれ以前の年度未納者	33名 (7%)
計	479名
	1972.12.25現在

#### 2 学会刊行物のバックナンバーについて

欧文誌DGDとその前身Embryologiaのバックナンバー、および発生生物学誌とその前身実験形態学誌のバックナンバーの在庫があります。御希望の方は、学会事務局へお申し込み下さい。

なお、会員外の方にも、また機関購入もおすすめしたいと思っております。

#### Ⅳ 研究機関紹介——その3

##### 北大理学部動物学教室発生学部門

北大の場合、昭和5年理学部設立当時、農学部の犬飼哲夫教授が理学部兼任として、発生生理学を担当され、講座としての設立をみる事がなかった。その後多少の曲折をへた後、市川純彦教授が発生学部門を担当されることになった。同教授は理学部の教養部担当教授であられたため、研究の本拠は理学部から教養部生物学科にうつされた。しかし動物学教室の発生学部門の研究と講義・実習はそのまま担当された。今日市川教授の後任として青戸借爾教授が部門を担当されている。同教授は内田亨教授の許で実験形態学を修め、その後下等脊椎動物と甲殻類について内分泌学的研究をされている。従って理学部では比較内分泌学を講義されている。同教授の許に現在、岩田文男・山本正・片桐千明助教授と若原正己助手がおり、教養部の講義・実験をもつと共に、理学部において山本・片桐が実験発生学、岩田が比較発生学、若原が発生学実習を担当している。山本助教授は市川教授と狩野康比古教授（現北大・理学部厚岸臨海実験所所長）の許で、魚類発生学を修め、魚卵の初期発生について研究を進めている。片桐助教授は同門で、卵・精子の相互作用と孵化酵素の発生学研究をつづけている。若原助手は青戸教授の許で、両生類視床上部の実験形態学的研究を進めている。最後に岩田は永く厚岸臨海実験所で、内田亨教授の許で、紐虫の系統分類を手がけ、こちらにうつってからも引きつゞき仕事を進めている。そのかわり、札幌近辺の海産動物数種の比較発生と紐虫の再生についての研究を、極めて小さい飼育装置をよりどころとして進めている。

(岩田 文男 記)

##### 新潟大学生物学教室免疫生物学研究室

当研究室の現在のスタッフは、教授村川新十郎・助手関谷国男・大西耕二・院生M.C.2. 皆川幸夫・M.C.1. 伊藤彰江および研究生の杵淵謙二郎と山下隆夫であるが他に医学部院生D.C.2の佐藤良也、学部学生4名も含まれる。

研究目標は下等脊椎動物における免疫能の系統発生および個体発生を解明することで、実験材料としてはイモリ、サンショウウオ、ウツガエル、ギンブナ等を用いており、研究は三つグループに大別されて行なわれている。

(1)免疫能の個体発生および細胞免疫の機構の解析は主として村川、関谷、伊藤、杵淵が担当

し、(2)液性抗体の産生機構および抗体分子の物理化学的性状の研究には、大西、皆川、山下、および佐藤等があたっており、また(3)下等脊椎動物の免疫細胞の *in vitro* での研究法の開発を意図して、両生類の幼生細胞の培養に関する研究が関谷を中心に進められている。

(村川 新十郎 記)

### 東京学芸大学 生物学教室

当教室では、研究室に特定の研究分野の名称をつけていないので、たとえば「発生生物学研究室」というような組織はない。

各研究室でとりくんでいるテーマのうちで発生生物学に関連のあるものには、動物の材料では、脊椎動物では虫類（藤原正武・岡俊樹）、無脊椎動物で線形虫類（井上巖）、植物の材料では、生長ホルモン（小林万寿男）、石灰藻類（古谷庫造・岡崎恵視）、羊歯類（川崎次男）などがある。これらの研究には修士課程学生・学部学生も数名ずつ従事している。

(藤原 正武 記)

### 東京大学応用微生物研究所第七研究部(生合成第1)

現在の研究テーマは次の通りである。

- 1 葉緑体の退化と再形成 — *Chlorella protothecoides* の葉緑体が、培養液中の有機炭素源、窒素源、及び光条件如何によって著しい退化と再形成を示す現象を研究している。
- 2 単細胞藻類の cell cycle — クラミドモナス、クロレラ、ユーグレナ等の同調培養細胞の示す cell cycle について、形態、生理、生化学的研究をすすめている。最近は特に、(i) cell cycle の長さ(時間)を決定する因子の研究、(ii) 細胞内顆粒(葉緑体、ミトコンドリア)の動向、に重点をおいている。

(長谷 栄二 記)

### 名古屋大学理学部分子生物学研究施設

当部門は運動機能を分子レベルにおいて解析することを目的として作られた(1961年)。生体の合目的的運動が出現するためには、いろいろの種類の蛋白質がそれぞれ重

合して特異的な線維状構造を作り、さらにこれらの重合体が規則正しく配列して高次の秩序構造をもたなくてはならない。従って構造決成の問題も主題の1つに加えられた。具体的には横紋筋、粘菌、ウニ卵などの運動性蛋白質、サルモネラ菌のべん毛蛋白質を材料にしている。スタッフには大沢文夫、朝倉昌、秦野節司、能村堆子、小林尚友、藤目杉江がいる。

(朝倉 昌 記)

### 金沢大学医学部病理学教室

当教室では種々の材料で結合組織の病的状態における機能の変化を電顕的及び組織化学的に広く研究しているがその一部として下等無脊椎動物のプラナリア (ナミウズムシ) の頭部再生 (1) とマウス皮膚の創傷治癒 (2) における表皮-結合組織の相互関係を電顕的に観察した。

- (1) プラナリアは再生力のきわめて強い動物で組織の新形成を観察するのに適した材料である。プラナリアの“基底膜”といわれている構造は電顕的に表皮の基底部が接する均質な部分とその下方の細線維に富んだ部分とに分けられる。再生部分を経時的に観察した結果、前者は表皮細胞から、後者は間充織細胞からそれぞれ合成、分泌され、両者の相互作用により基底膜が構築されるらしいという結論を得ている。
- (2) マウスの皮膚の基底膜はルテニウムレッド (RR) 陽性である。

再生中にRR陽性物質が表皮基底細胞より分泌され、この物質がHemidesmosomeの部に凝集する。次にHemidesmosomeの増加に従いRR陽性物質は表皮細胞の直下にlamina lucidaを形成し、下方は新しく増殖したコラーゲン線維の働きでlamina densa及びzona diffusaが形成される。この一連の再生過程でHemidesmosomeはきわめて重要な働きを行っていると考えられる。

(梶川 欽一郎 記)

### 大阪大学理学部生物学教室 (神谷研)

- 1 細胞性粘菌の発生過程における遺伝的制御の研究のため、その性の存在と決定様式について (福井義、三宅)
- 2 同生物集合期における細胞選別の要因について (福井優)
- 3 同生物移動期における運動機構とそこにみられる細胞選別について (山本)



- 4 フシナジミドロにおける極性の発現と維持について (片岡)
- 5 アオミドロの仮根形成について, 主としてphytochrome controlled reaction について (長田)

(山本 将 記)

### 大阪教育大学 生物学教室

当教室の発生生物学関係の研究は下記のように三つに分けられる。その他多少関連ある分野としては生理学・生化学や細胞遺伝学の研究室もあるがこゝではふれない。

- 1 両生類胚のオルガナイザー形成に関するもの — 中村治 (教授) が長年にわたり, 高崎裕子 (助手)・院生・卒論生などの協力の下に研究している。胞胚期・桑実胚期・32細胞期などにおけるオルガナイザー予定域を調べるとともに, オルガナイザー形成における割球間の相互作用を手術的に確認してきた。最近では32細胞期より若い胚を用い割球分離と組合せの実験でオルガナイザー形成が誘導的になされるのか, 勾配的な性質に基づくものかを, 手術的・電顕的に, またオートラジオグラフィ法や胚に含まれる物質の分析的方法も含めて総合的に行っている。
- 2 ニワトリ胚発生にともなう血液細胞のウイルス感受性の変化について — こゝ数年田原 胖 (教授) が院生・卒論生などの協力を得て行なっているもので, ニューカッスル病ウイルスに対するニワトリ胚赤血球細胞の感受性の変化が, 血液細胞の発生的変化に対応していることを見出したが, 今のところ血液細胞の微細構造的変化との関係を明白にすることが中心課題である。
- 3 腔腸動物の発生過程に関するもの — 最近着任した加藤憲一 (助教授) が青地正寿 (研究員) および卒論生らと共にすすめているもので, 現在ミズクラゲの変態過程における物質変動と, 解離細胞の培養などにより基本的性質の変化が何であるかを調べつつある。近くヒドロ虫類についても同様の目的の仕事をはじめの予定。

### 甲南大学理学部生物学教室

- 1 高谷博 (教授) は両生類胚における脊索の空胞化の過程の詳細な観察と, 空胞化の進行に関与する環境条件の解析とを大学院学生と協同で行なっている。
- 2 増田秀雄 (教授) は両生類胚の解離細胞, 特に脊索細胞の分化に必要な条件をしらべ

ると共に、分化の過程における細胞器官の発生を追っている。(1・2増田 記)

8 加地早苗 (教授) と園部治之 (助手) の研究室では下記のような研究を行っている。

a ショウジョウバエの棒眼の形質発現機構の研究 (加地) :

複眼原基の組織, 細胞分化について, 形態的 (電子顕微鏡, 体外培養) および生化学的 (トレーサーを用いて) に追求している。

またこの課題と関連して, 細胞増殖の促進, 抑制についてショウジョウバエ以外の動物 (アルテミア; マウス腹水ガンなど) を用いて細胞分化に対する物質の影響をしらべている。

b カイコ休眠因子の作用機構 (園部) :

カイコの休眠因子は卵巣の3-ヒドロキシキヌレニン量を増加させる。この機構を血液中からの透過, 卵巣自身での合成の両面から解析している。(3は加地 記)

## V 会 員 変 動

1. 新入会員 ㊦下記氏名につづく①は所属 ②は研究テーマ

○小沢鉄二郎 ①東京医科歯科大学 医 薬理 — 東京都文京区湯島1-5-47 (113)

②骨格筋の発生

○加藤 義臣 ①国際基督教大学 生物 ②昆虫 (カイコ) における脱皮, 変態の機構

○橋本 碩 ①静岡大学 教育 生 ②海生ユスリカの研究

2. 名簿訂正

9頁 上田 朝一 朝日新聞社出版局 事務編集室 所属変項の為下線部分不必要。

34頁 松崎沙和子 高知女子大 動 — 高知市北与力町1 を 永国寺町5-15と  
訂正。

38頁 山上健次郎 山下健二郎 を左記のように訂正

おわび：山上健次郎氏（東京大・理・動）のお名前を大きく間違えて  
ました。校正段階では8人の眼を通したのですが、申しわけありません。  
おとどけた名簿は選挙の基本名簿としても用いられましたので、事務局  
は御本人におわびするとともに、選挙管理委員会に連絡し、選管では山上  
氏を指すと思われる投票について適切な判断をして下さいました。大事な  
時期における事務局のミスでした。御本人と全会員におわび致します。

事務局

昨秋英文誌DGDの海外向けの大変美しい広告カードが出来上がりました。  
事務局では順次海外研究機関に送っていますが、国際学会などで外遊の機  
会のある方は、このカードを持参いただけませんか。事務局へ御連絡下さ  
い。